昭和初期の建築史文献に於ける日光東照宮評価

—近代に於ける日光東照宮評価—

STUDY ON THE ESTIMATION OF TOSHO-GU IN THE LITERATURE OF
ARCHITECTURAL HISTORY IN THE EARLY YEARS OF SYOWA

—The estimation of Nikko Tosho-gu in Modern Japan—

内田 祥士*

Yoshio UCHIDA

In the Meiji Period, the estimation of Nikko Tosho-gu written in the textbook of the compulsory education was high,
but that of the specialists were under the conflict between admiration and criticism in their mind.
In the early years of Syowa that in the complete history about Japanese architecture, the textbook of higher education, was lower,
though that in the compulsory education was still high.
Therefore the estimation of Tosho-gu between compulsory and higher education was becoming split.

Keywords : Modern, NikkoTosho-gu, Kisida Hideto, Fujioka Michio, Fujisima Gaijiro, Bruno Taut

近代、日光東照宮、岸田 日出刀、藤岡 通夫、藤島 亥治郎、ブルーノ・タウト、

1. はじめに

前稿「近代日本の初等教育及び専門教育に於ける日光東照宮評価」^{注01}で、明治中期、主に専門家の間に日光東照宮^{注02}評価を巡って既に賞賛と批判が併存する葛藤が存在したこと、それが初等教育と専門家の見解の間に齟齬を生み出したことに言及した。また、拙稿「大正期に於ける日光東照宮寛永造替工期の訂正と当時の東照宮評価」^{注03}で明らかにした様に、東照宮評価に於ける専門家の葛藤は、大正後期から昭和初頭に行われた寛永造替工期の訂正とは独立した問題であった。では、近代日本の東照宮評価を巡る葛藤は、その後の様に継承或いは解消されていったのだろうか。本論ではこの点について、特に昭和初期の建築史文献に於ける東照宮評価を通して検証する。

昭和初期とは、稲垣栄三の「考えてみれば大正年間までは、日本建築の通史はあらわされておらず、昭和になってはじめて記述されたのであるから、ある意味では日本建築史は昭和から始まったといっても過言ではない。」⁰¹との指摘がある様に、はじめて日本建築の通史が書かれた時代であった。建築史の通史があらわされたということは、日本建築史研究が、それを可能にする段階に達し、日本建築史の全体像に対して一定の見識を有する研究者があらわれたということに他ならない。そこで本論では、日本建築の通史における東照宮評価を中心に据えた上で、他の関連文献における評価との比較

を通して、東照宮評価を巡る葛藤が、昭和に至って、どの様に変化したかを明らかにしたい。一方、研究者の東照宮評価は、昭和8年のタウト来日以降、彼の著作からの引用や発言の援用を極めて多く含む様になる。従って、タウトによる批判^{注04}とその影響を概観する必要がある。勿論、その目的は、タウトの発言の確認であって、タウト自身の東照宮評価の検証ではない（この点については後に詳述する）。

以上の前提を踏まえて、まず始めに日本建築史の通史に表れた東照宮評価を概観する。次に、タウトの主要著作を通観し、その東照宮批判を整理する。その後、他の関連文献を参照しつつ、タウトの影響を検証し、最後に昭和初期の建築史文献に於ける東照宮評価の在り様を明らかにする。

2. 通史に見る東照宮評価

まずは、稲垣の指摘に従って、昭和初期の通史に於ける東照宮評価を年代順に概観して行きたい。

2. 1 天沼 俊一著「日本建築史要」⁰²

本書の刊行は昭和2年である。冒頭の「出版する迄の経緯と読者に對する希望」⁰³によると、本書は、天沼が「ある書物の一部へ日本の建築史をかいた」⁰⁴ものを「神戸高等工業學校教授古宇田實氏より、同校夜學部で教科書にするから、單行本として出版してはど

* 東洋大学工学部建築学科 助教授・修士(工学)

Faculty of Engineering, Toyo Univ., M. Eng.

うかと勧誘された」⁰⁴のが発端となったとあるから、高等教育用教科書として刊行されたものである。

さて、東照宮に関する記述は「第九章江戸時代 第三節霊廟」に概説が、「同章 第四節實例 二、日光東照宮」に東照宮に関する記述が纏められている。そこには「寛永元年に至り徳川家光は甲良豊後守宗廣を棟梁とし、大規模の擴張を企て工を督し善美を盡せるものたらしめ、遂に寛永十三年諸堂の完成をみた、即ち現存の建物である。」⁰⁵とある。但し、欄外に「寛永十一年着手、足かけ三年正味一年半の短日月を費し、同十三年落成したのが事実であるさうである。少し短か過ぎる様であるが、いくらか用意さへしておけば、できぬ事はあるまい。」⁰⁶との注記がある。本書の刊行が、大熊喜邦の「日光東照宮の寛永造替に就て」⁰⁵が建築雑誌に掲載される一年以上前であることを考えると、この対応は妥当である。

一方、伊東忠太や関野貞が、その価値を認めつつも、装飾の濫用或いは繁縟といった表現で些か批判的な見解を表明した過飾性については、陽明門に触れた部分で「彫刻の方法は丸彫・透彫・薄肉・高肉、其種類は、人物・動植物・雲紋等あらゆるものがある。要するに此門は意匠甚だ豊富で、彫刻また精巧であるが、門全体としての恰好及び細部の手法に於いては尚ほ研究の餘地がある」⁰⁶と述べてその評価を留保している。

2. 2 藤島玄治郎著「日本建築史」⁰⁷

本書は昭和5年の刊行である。藤島は「序」に「日本建築史の大要を得ん爲に、本書は作られた。従つて重要な事物に就いて洩れなく簡明に、記述を行つた。編史法及び論法は最も穩健な事を旨とし、在來最も適當と認められた方法を探り一切の私見を差控へた。標準的な知識を得ん爲に、特に利用せられるであらう事を信ずる」⁰⁸と記している。本書が極めて一般的な日本建築史の概説書であることを明らかにした一文である。日光東照宮に関する記述は「第十章江戸時代 四 神社〔實例〕」の冒頭に、以下の様に記されている。

「1 日光東照宮（栃木縣上都賀郡日光町）寛永十一年—寛永十三年徳川家光が棟梁甲良豊後守宗廣に命じ造らせた。土地の高低を巧に利用し、主要建築は左右均齊に配置するも其の他は地形に應じ屈折變化の妙を極め、杉林の中に極彩色の殿堂を配し、自然と人工との美の調和を計つて居る。併し箇々の建築は桃山時代の特質が爛熟の度を超えて既に墮落の一步に進んだもので、彫刻や彩色の亂用は建築の本質を無視して居る」⁰⁹。また、陽明門については「三間一戸樓門、屋根入母屋造四方軒唐破風付、抖拱詰組唐様風。各部を丸彫・透彫・高肉彫・薄肉彫等で充填し、柱廻りは胡粉塗・抖拱は黒漆塗、高欄や壁間の彫刻等は極彩色する。初層天井は鏡天井とし、墨畫及び彩畫とする。」¹⁰という解説が添付されている。

昭和5年とは、先に言及した大熊の論文が発表されて既に2年が過ぎている。従つて、寛永造替工期の訂正は自明の扱いである。東照宮評価は、その配置計画を「自然と人工との美の調和」と賞賛しつつも、個々の建築は「桃山時代の特質が爛熟の度を超えて既に墮落の一步に進んだもので、彫刻や彩色の亂用は建築の本質を無視して居る」と強く批判しているが、藤島は、それを「論法は最も穩健な事を旨とし、在來最も適當と認められた方法を探り一切の私見を差控へた」評価として記している。

2. 3 岸田日出刀著「日本建築史」¹¹

昭和7年、「日本建築史・支那建築史」という表題で刊行された

前半部分である。因みに「支那建築史」は藤島玄治郎の執筆である。その「自序」には「本書は日本に於ける建築の變遷發達の跡を綜觀的に理解し易からしめやうとの主旨から編述されたもので、決して日本建築史の特殊な研究書ではない。上代以後明治維新までの日本建築通史ともいふべきものである。」¹²とあり、東照宮に関する記述は「第十章江戸時代・（二）廟建築・（二）」にある。

その冒頭は「當代靈廟建築中制度最も完備した代表的の實例である」¹³と始まっているが、その後「本廟の建築は、當代初期工藝の粹を發揮したものであるが、全體の意匠上からみると、未節の裝飾にのみ拘泥して全體の形や比例等を忘れたかの觀があり、恰もフランスの近世ロココの裝飾を想はせるものがある」¹³となり「陽明門は三間一戸の樓門で入母屋造四方軒唐破風をもつ特異の形式で、俗に日暮門としてあまりにも有名であるが、全體の形には不満の點多く、法隆寺中門等にみるような比例釣合の美は到底みられない」¹⁴と結ばれている。また、工期については「僅か十數ヶ月にすぎなかった」¹³とした上で、平泉説⁰⁶と大熊説⁰⁵が注記されている。

岸田の東照宮評価は、まず塚本以来の評価⁰⁷を踏襲して東照宮をロココ様式に例え、関野貞を継承⁰⁸して「完備した代表的の實例」或いは「當代初期工藝の粹」と評した上で、その過飾性を批判しているという意味では、過去の研究成果を統合し再構成した記述である。ただ、陽明門を法隆寺中門と比較した上で、そこに比例美の不在を指摘するというのは新しい視点である。

2. 4 大岡 実著「建築様式」¹⁵

昭和8年、大岡は「本書は所謂日本建築史を述べやうとするのであるが、その叙述の立場は些か從來の諸書と趣を異にしてゐる。本書が述べんとする所は、現在の日本建築史の大系は如何なるものであつて、それは又如何なる経路を以て發達して來たかを明らかにするにある。即、現在日本に於て研究された日本建築史の範圍を示すものであり、従つて未だ研究されざる部分を明らかにせんとするものである」¹⁶と記した上で「第9章江戸時代第4節廟建築」で東照宮に言及している。

この節は「108廟建築隆盛」と「109遺 構」からなる。

「108廟建築隆盛」には、久能山及び日光東照宮から諸大藩に於ける藩祖の廟に至るまで「いずれも自己の勢力を象徵するべく、出來る限り力を盡したため頗る壯麗である」¹⁷と書かれている。また、「109遺 構」には「日光東照宮（明治41年8月指定）家康薨後遺命によつて元和2年4月造營に著手、翌年3月竣工久能山より遺骸を改葬した。其の後寛永元年將軍家光規模を擴張して改築を企て、甲良宗廣を棟梁として財を惜しまず、造營善美を盡し裝飾亦贅を盡したものである。寛永13年4月工を竣つた。建物は土地の高低に應じて配置され變化の妙を出している。しかし、其の極端に華を競つた結果は裝飾の過繁を來してゐるのであつて、當代建築の發達の頂點を示してゐると同時に當代後半期に於ける惡傾向の第一歩を明らかに示しているのである」¹⁸と記している。

上記の内、寛永造替に関する部分は、大正2年「工業大辭書」に掲載された関野の「徳川時代の建築」⁰⁸を内容・表現とも継承したものである。昭和8年という本書の刊行時期を考えると、大岡が寛永造替工期の訂正に些かの疑義を表明した一文とも理解出来るが、それにしても、少なくとも大熊喜邦の「日光東照宮の寛永造替について」⁰⁵の存在には言及してしかるべきである。一方、東照宮評

価については関野と殆ど同じであるが、最後に「當代後半期に於ける悪傾向の第一歩を明らかに示している」と指摘して、江戸時代後期を批判的に評価する視点に立って、東照宮にその兆しを見出している。

2. 5 関野 貞著「日本建築史講話」¹⁹

刊行は昭和12年である。巻頭に武蔵高等学校では「二五八七（大正十五）年高等科ができた年から、毎年専門家を聘して民族文化講演といふ特殊講義を約十時間行ひ、高等科生徒には必修課とし」²⁰てきた経緯があり「関野博士の講演はその第四回に當る」²⁰とあるから、内容は高等教育向けのものである。東照宮は「第九章 江戸時代 四 靈廟建築」に「日光廟は建物としては大きくはないが、技術の優秀、装飾の華美な點に於ては將に世界一に位するものがあります。總てに於て工藝を十分利用せる點は前時代に優るものがあります。桃山時代の装飾に於ては猶雄大な氣持が十分ありますが、日光は精巧とか巧緻とか云ふ點に於ては驚くべきものがあるのみで、大きい力強いものはないのであります」²¹と紹介されている。先に言及した「工業大辭書」^{28 08}の内容を解りやすく解説したもので、その評価は当時と同じである。

2. 6 足立 康著「日本建築史」²²

本書の刊行は昭和15年である。足立は「序説 一 日本建築史の特質」で「伊勢神宮に拝するやうな建築意匠は（中略）極めて高度な完成を示してゐるのである、この建築精神を正しく繼承してゐるものが即ち眞の意味での日本建築であらねばならぬ」²³と述べた上で、「第五章 桃山江戸時代 五 石間造の流行」の後段で「この石間造の形式を採用したものに靈廟建築がある。廟建築は古くからあるが、江戸時代に發達したものは特殊な性質を具へてゐる。その代表例として擧ぐべき日光の東照宮は、恰も神社と寺院と墳墓との諸性質を兼ね、その神殿の形式は石間造、これに神樂殿・神庫・鳥居の如き神社の建築を具へ、一方輪藏・藥師堂・護摩堂・五重塔の如き佛教建築を有し（中略）繪様・彫刻・金具・色彩等を以て極度に裝飾してあるのは他に全く類例を見ない。就中陽明門の如き、一見極彩色の彫刻を以て組立てかの如き觀があるのはたゞ驚くのみであるが、その建築としての本質を減却してゐるのは、惜しむべきである。たゞ多くの社殿・堂塔を自然の地形を利用して巧みに配置し、その自然との調和を企てゐるところには見るべきものがある」²⁴と記している。

「繪様・彫刻・金具・色彩等を以て極度に裝飾してあるのは他に全く類例を見ない」という指摘は、希少性を評価したものと考えてよからう。陽明門に対しては「一見極彩色の彫刻を以て組立てかの如き觀があるが」「建築としての本質を減却してゐる」と記して明確に批判している。尚、足立は「權現造と石間造」^{28 09}という論文を「日本建築史」刊行の翌年、「建築史」に發表している。

以上、昭和初期に刊行された主要な通史に於ける東照宮評価を概観した。^{28 10}

陽明門に対する、藤島の「建築の本質を無視して居る」或いは、足立の「建築としての本質を減却してゐる」といった指摘は、相当強い批判である。藤島は本質の内容に言及していないが、足立は「伊勢神宮に拝するやうな建築意匠」を正しく繼承している建築こそ「眞の意味での日本建築」であると自らの「本質」観に言及している。また、足立の著作は、後述するタウトの一連の発言以降のもの

のである。陽明門に「法隆寺中門等にみるような比例釣合の美は到底みられない」という岸田の主張は、その過飾性のために比例美が見えなくなってしまうと言うよりは、寧ろ、たとえ裝飾を取り除いてもそこに法隆寺中門の様な比例美は見出せないと指摘していると考えた方が文脈に合っている。従って、過飾性に対する批判というよりは比例美の不在に対する批判と取るべきだろう。大岡の「當代後半期に於ける悪傾向の第一歩を明らかに示している」という表現もより踏み込んだ指摘である。関野が従来の評価を踏襲し、天沼が評価を留保している以外は、全体として、過飾性の指摘よりも一歩踏み込んだ批判が支配的である。

一方、藤島は「自然と人工との美の調和」の存在に言及しているし、岸田も末節的であるとの結論ではあるが尚「當代初期工藝の粹を發揮したものである」と言っている。大岡も同様である。足立もその裝飾に対して「他に全く類例を見ない」という一言を忘れていない。従って、総じて批判的な指摘が強化されているが、近代日本の東照宮評価の特徴である葛藤は、依然として失われていない。

3. タウトの著作に見る東照宮評価

ここで、本論冒頭でも述べた様に、タウトの著作を通観しておくことにするが、予め、敢えてタウトの著作、それも邦訳書を問題にする理由に言及しておきたい。

タウトは、昭和8年5月の来日から昭和11年10月の離日迄の間に、多くの講演を行い雑誌に執筆し著作を公にした。その出版は離日後も続いており、更に他界後、戦時下に於いて既に全集^{28 11}が刊行されている。ところで、タウトの発言の内、最も広く知られているのは、その著作、それも日本語に翻訳された著作である。東照宮評価に於けるタウトの援用や引用も、概ねこの邦訳書を基に行われた。また、本章の目的は、タウトの著作に表れた東照宮評価の整理であってタウト自身の研究ではない。従って、あくまで邦訳書の内容に注目する。換言すれば、邦訳書の内容とタウトの真意の間に不幸にして齟齬が存在したとしても、ここではそれを問題にしない。

以上の前提に立って、タウトの代表的な著作として最も広く知られている「ニッポン」、「日本文化私観」そして「日本美の再発見」の三冊を取り上げて、その東照宮批判を通観する。

3. 1 「ニッポン」²⁵

昭和9年に刊行された本書は、タウトの日本に於ける最初の著作である。建築関係者を除けば、日本人の多くがタウトを知る契機となった一冊である。現に、本書はその事を深く意識した構成になっている。

巻頭に添えられた岸田日出刀の一文「ブルノ・タウト氏に就いて」は「ブルノ・タウトとはどういふ人か」²⁶という問いに始まり、「本書はタウト氏の日本観である。外國人の日本観といふものはあまりに私共は慣れすぎてゐる。しかし本書に示されてゐるタウト氏の日本観は決して世の常の外國人のものとする表面印象的な日本観と同列のものではないことを信ずる。寡言で哲學者らしいタウト氏が、ぢ一つと日本といふものを見つめてできたのが本書である。吉田兼好に私淑してゐるあたり、タウト氏の風貌をそのまゝ見るやうで懐しい。兼好の物の見かたに共鳴するといふことだけでも、タウト氏がどれだけ深く日本といふものを見てゐるかといふことが譯であらう。本書の江湖にすゝめたい」²⁷と結ばれている。岸田による紹

介に続いて今度は著者タウトが「何故此の本を書くか？」²⁸との一文を掲げ、「ニッポン！それはヨーロッパにとり、またヨーロッパ文明が支配する世界の部分にとつて、昇りゆく太陽の國である」²⁸と賞賛し、日本に対する知識が未だ十分ではないことを自ら断った上で「今こそ當に日本の文化が轉換期にあるやうに思へるのだ。悠長に構へ込んでゐられない、それどころか、日本のありとあらゆる現象をすぐて將來に對して通用する一つの視點を見出さねばならぬ」²⁹とて来ており、「皮相淺薄の誹謗は敢へて怖れるにも當らぬらしい。」²⁹と、自らの発言に対する期待感の存在とそれに答える意志を明らかにしている。そして、「伊勢」「桂離宮」にそれぞれ日本的なものを見出し、惜しみなく賞賛する。以下に言及する「天皇と將軍」は、それに続く章で、本書の中で最も明確に東照宮を批判した部分である。

ここでタウトは「伊勢」と「桂離宮」に「反してかの京都、東京、日光、鎌倉等のかつては將軍が住み、今は社寺と變じた屋敷が如何に異なつてゐる事か？其處には絢爛眼を奪ふ底のものがある。敢へて柱が漆塗り。金泥塗りであるのみでない、床さへも塗つてある。そして、これら建築には所狭きまでに彫刻や繪畫を施してある。然も建物の骨格が少しも残つてをられむ事さへ珍しくないのだ。」³⁰或いは「それらは様式全體が支那よりの輸入の故に日本的ではないのだ（中略）然も此の輸入と雖も正しくは理解されてさへゐない」³¹と述べた後、「日光東照宮のかの有名な門を一度でもよいから先入主を交へずに見るがよい！粗放極まる無意味ではないか？（中略）それなのに撰りに撰つてこんなもので外國人の間に廣告せねばならぬとは？」³¹と東照宮批判を展開している。

3. 2 「日本文化私観」³²

本書の刊行は「ニッポン」刊行から2年後の昭和11年である。タウトはその冒頭「床の間とその裏側」で、先の著書「ニッポン」に言及し「今の私としてもその當時書いたもので撤回及至改變すべきものは何一つ認めてはゐない。」³³と述べて、自らの日本観に変更が無いことを確認した上で、「彫刻」に於いて次の様に述べている。「歐羅巴のバロックと同時に出現した、あの日本のバロックな建築物、特に日光は華美を愛した權力者の命令を受けて、彫刻的な装飾を施してあるものであり、建築的に換言すれば生産的創造の意味に於ける藝術として、何らの價值を持つものではない」³⁴。尚、その後段で、ヨーロッパを含めた議論として「建築と彫刻とを融合させようと云ふ試みに對して、それが失敗であつたと云ふことを私は自信を以て斷言することが出来る」³⁵とも記している。更に、次の「藝術稼業」では「桂には、バロックや退化した日本の將軍建築にみられるやうな、あの濁らされ得るやうな建築要素は何もない」³⁶と賞賛した上で、「建築」に於いて「日本の建築家は眞に此の點に鑑みて決斷しなければならぬのである。進むべき道はたゞ一つしか有り得ない—桂離宮を経て建築術へ、然らずんば、日光廟を経て俗惡品へ」³⁷と日本に對して選択を迫っている。

3. 3 「日本美の再発見」³⁸

本書はタウト他界後の昭和14年刊行である。第1章に当たる「日本建築の基礎」の冒頭部分に「東洋古代建築の最高權威の一人である伊東（忠太）博士は、最近日本のある専門雑誌で次のやうなことを言われた、『五十年前にヨーロッパ人が日本に来て、日光こそ日本に於ける最も價值ある建築物であると言へば、我々日本人も

またさうだと言ふし、今またブルーノ・タウトがやつて来て、伊勢神宮と桂離宮こそ最も貴重な建築であると言へば、我々もまたさうだと思ふのである』と。我々ヨーロッパ人の體系的叙述を凌駕する至妙の東洋的皮肉である」³⁹という一節がある。この指摘は、近代日本の東照宮評価に顕在する葛藤の一面を射抜いている。従つて、それに続く「所詮我々は自分の意見を述べる以上のことはできない。」

⁴⁰というタウトの姿勢と、その後に見出される「伊東博士は、自國の藝術に對する判断があまりにヨーロッパ人の判断に頼り過ぎてゐたことを指摘されたが、この批評は確かに肯綮にあたつてゐる。」

⁴¹という一文は、タウト自身の日本観もまた、一人のヨーロッパ人の意見に過ぎないことを自ら示唆したものと考えるべきだろう。

さて、本書で東照宮は次の様に語られている。「専制者藝術の極致は、日光の東照宮建築である。ここは伊勢神宮に見る如き純粹な構造學もなければ最高度の明澄さもない。材料の清淨もなければ釣合の美しさもない、即ち凡そ建築術を意味するところのものは一つもないのである。そしてこの建築術の缺如に代るところのものは、過度の装飾と浮華の美とである」⁴²、東照宮の價值とは「所謂世界の名建築と稱せられる名所と同じく、その効果はかかつて部分の總計にある、いはば二十萬の軍隊は二萬の軍隊よりも多數であると言ふが如くである」⁴³と実に解りやすい評価を下している。換言すれば、世界は文化の相違を越えて、或いはそうした理解を前提とせずとも、密度と量は理解し合えるという指摘である。

3. 4 邦訳書に表れたタウトの東照宮評価

以上を整理すると、タウトの東照宮批判の特徴として以下の4点を挙げる事が出来る。まず第一に、装飾そのものに対する批判である。タウトの装飾批判は、明治中期以降、日本の専門家の中に広く見出される装飾の濫用或いは繁飾に對する批判とは明確に異なる。タウトは、建築に彫刻装飾を用いること自体を批判している。従つて、本来建築に施されるべきでない装飾が、濫用或いは繁飾と表されるほど迄に施されてしまった東照宮に對する批判はとりわけ強く、少なくとも邦訳書を読む限り、塚本靖や伊東忠太以来、日本の専門家に広く見出された葛藤、即ち、批判と評価の併存は関知されない、況や賞賛は全く見出せない。

第二に、彫刻と彩色を以て建築を装飾するという行為が、本来の日本の在り様ではなく、中国からの輸入様式であり、しかも極めて皮相的な、或いは未消化な模倣であるとの批判である。この批判は、明治40年の「見廟建築の美を論ず」⁴⁴に於ける伊東忠太の「人或は曰く、日光建築の缺點は即ち同時に其長所なり、蓋し斯の如き空前の創意を以て縦横經營するに當りては、往往常規の外に逸するものあるは素より其數なりと然れども所謂創意なるものは、實は明式の直寫に歸すべきもの多し、余を以て之を見れば、則ち之れ明式の適用を誤り、所謂濫用に陥りたるものなり」⁴⁵という言説と相通じるものがある。

第三に、「桂離宮を経て建築術へ、然らずんば、日光廟を経て俗惡品へ」といった発言に象徵される様に、東照宮を歴史的建造物として、現代建築とは切り離して評価しようとする姿勢が見出せない点である。勿論、この点は、評価は正反対であるが、桂離宮礼賛にも共通するところである。

最後に、塚本靖以来、近代日本に於いては、東照宮をロココ様式に對應させるのが一般的であつたのに對して、タウトがこれをバロッ

ク様式に対応させている点も指摘しておきたい。

4. タウトの援用と批判

以上の様なタウトの発言を受けて、専門家、特に建築史研究者は東照宮評価に際して、屢々タウトの発言を援用或いは引用する様になる。次に、そうした言説を取り上げつつ、彼らの東照宮観の展開に言及したい。

4. 1 岸田日出刀と藤島亥治郎

まず、先に概観した日本建築史を執筆した研究者から、最も積極的にタウトを援用した岸田と、批判例として引用した藤島の発言を取り上げ、その東照宮評価を検証する。

岸田日出刀「日本の古建築を見直す」⁴⁶

昭和9年、「国際建築」に掲載されたものである。ここで岸田は、自らが過去の自著を振り返る事を好まないのは「時と共に新たな進歩をするからだ」⁴⁷と記した上で、数年前の著作である「過去の構成」から、今日に於いて尚「變らぬ新しい感激を受けることができる」といふのは、私に進歩がないためではなくて、過去の構成そのものが高度の永遠性をもつてゐるからだと思ふ⁴⁸と述べた後「心ある建築家ならば敢てタウト教授に教えられるまでもなく、伊勢神宮と桂離宮の建物が古今の超越した絶世の傑作であること位は既に承知してゐる筈である。タウト教授に言はれて始めてさうなのかなと感じ入る人もあるまいが、タウト教授といふ異國人の語るの聞いてはじめて自國の建築のつよさを認識するといふやうな種類の人もいないではないやうに思はれる」⁴⁸とタウトに言及し、最後を「下に、ブルノ・タウト教授の『予は日本建築を如何に観るか』の小文を拝借して小稿を終わ度い。(中略)私自身の言葉では反響が小さい。世界の建築家ブルノ・タウト教授の言とあらば、すべての人がなるほどと肯くだらう」⁴⁹と結んでいる。

転載されたタウトの文章「予は日本の建築を如何に観るか」⁵⁰は岸田の訳で、内容は既に述べた各書に同じである。因みに、東照宮を「かやうな豊麗さは世界のどこでもみられるもので、(中略)これを見に態々日本まで遠くやつてくることもない」⁵¹と指摘した上で「桂離宮は、しかしこれとは全然違ふ。」⁵¹と述べている。

ここで、著者岸田が自ら今日に於いて尚「變らぬ新しい感激を受ける」と記した「過去の構成」⁵²にも触れておきたい。^{註12}体裁は、後述する藤島の「日本美の建築」同様、写真集に近いもので、その「7 2 日光五重の塔初重軒裏」⁵³で、岸田は同部分の写真に添えて「日光廟の建築から、何らかの教訓を見出すといふことは、随分むずかしい。東照宮がもつてゐる歴史上の價値は論外である。現代人の自分の心を鞭打つてくれるものは、残念ながら一つもない。(中略)五重の塔も陽明門も、法隆寺の五重の塔と中門に並べられて、その醜惡な形を一々指摘される例に挙げられる位がをちであり、(中略)こんな建築は二度と経験したくないものである」⁵³と記している。東照宮に関する写真は、この「初重軒裏」1枚のみである。これは、批判ではない。明らかに嫌惡の情の表明である。先に言及した「日本建築史」とは全く異なる東照宮観であるが、逆に岸田が「日本建築史」執筆に当たって、如何に主観を排除すべく努力していたか、藤島の言説を援用すれば「穩健な事を旨とし、在來最も適當と認められた方法を探り一切の私見を差控へた」かの証左でもある。しかし、同時に、岸田の東照宮観は、従来の賞賛と批判の併存

という葛藤の範囲を超えて、最早公私の狭間で分裂していたと言つて良いだろう。

藤島亥治郎「日本美と建築」⁵⁴

本書は解説を付した写真集に近い構成で、昭和17年に刊行された。「起承転結」の4大見出しの最後、「結」の「武の建築」と題された章に「金碧」という表題で東照宮と大猷院が掲載されている。東照宮は、陽明門の写真2枚で表現されている。そこに付された解説文には以下の様に書かれている。「讀める人は多く俗人。曰く「自然と人工との妙なる調和。」曰く、「日光を見ざれば結構といふな。」曰く、「死ぬ迄に是非一度は日光を見たい。」」⁵⁵それに対して「貶す人は多く建築や諸藝術の専門家である。曰く「日本のロココ様式建築。」曰く、「封建制度の縛られた末期的建築。」曰く、「將軍趣味の建築」(ブルーノ・タウト。)曰く、「虚偽の裝飾が充満して建築の神髓を失つた。あれは建築ではない。」」⁵⁶そして「殊にブルーノ・タウトは極端な嫌惡の情を以て、之を惡罵した」⁵⁶。しかし、タウトの「將軍一派によつて為された、虚飾と惡趣味」⁵⁶という主張は、以前から「多くの活力ある建築家が抱いてゐる」⁵⁶ものと同じで、私自身は「その何れも伍し難い」⁵⁶と述べた上で、当時の時代思潮を考えれば「過飾された建築意匠にも價値ありとせねばならない」⁵⁷「精細な刀技を駆使して建築の隅々に至るまで(中略)仕上げた技術」⁵⁷そして「あれだけの藝術を僅か三年に滿たぬ中に(中略)仕上げた技法」⁵⁷更に「社殿の配置が統制あつてしかも變化の妙を極めた」⁵⁷点は優れていると評価し「かくして日光建築の價値は定まつた。即ち盲目的に讚歎するのも誤なれば無下の輕蔑も當らない。これを核心より解析して以てその良さも惡さも私心なく見るべきであると思ふ」⁵⁷と結んでいる。藤島の見解は、近代日本の東照宮評価に於ける葛藤を継承する意志を明らかにしたものである。

同時に「讀める人は多く俗人(中略)貶す人は多く建築や諸藝術の専門家」という構図を指摘することで、東照宮評価を巡って、一般の人々と専門家との間に、価値観の分裂が生じていることも示唆している。

4. 2 伊東忠太と藤岡通夫

更に、既に明治中期以来、日光について多くの発言をしてきた伊東忠太と、後に「建築学大系」で日本建築史の近世の大部分を執筆することになる藤岡通夫の言説も確認しておきたい。特に、藤岡は、最も真摯にタウトを批判した研究者である。^{註13}

伊東忠太「建築美について」⁵⁸

昭和10年、「国華」に2回に渡って連載された論文である。伊東は「二、形態美の三原則」に於いて、「釣合と調和」「均齊と均衡」「統一と變化」を挙げた上で、「三、建築美の条件」では、より具体的な条件として、環境・質量・材料・構造・構成・線・色・裝飾の8つの項目を示し、その裝飾の項で「我國に於ても、伊勢兩宮の如き殆ど無裝飾に近くしてしかも清淨端嚴の美を現はすものもあるが、日光東照宮の如き豊富なる裝飾を濫用して却て惡趣味として非難さるゝものもあり、結局裝飾の過多は戒むべきであるが、若し優良なる建築の骨格の上に、善美なる裝飾を加ふるならば、その美は更に倍する。」⁵⁹と述べている。また「五、実例」に於いては「二、神明造」と「十四、桂離宮」で、タウトの発言を引用^{註14}している。実例は全部で14示されてるが、そこに東照宮は含まれ

ていない。

「優良なる建築の骨格の上に、善美なる装飾を加ふるならば、その美は更に倍する。」という見解は、伊東の東照宮批判が、あくまで過飾批判であって、装飾批判ではないことを明らかにした一文である。最後に、大正時代には「本邦無二の國寶」と評した伊東が、実例に東照宮を入っていない点は、強調しておきたい。

藤岡通夫「*外氏著『ニッポン』を讀みて日光廟の建築を論ず*」⁶⁰

この論文は、昭和12年3月号の「畫説」に発表されたものであるが、その冒頭で藤岡は「ブルノ・タウト氏の「ニッポン」（譯本）を讀んで、僅か一年程の滞在に、かくもよく日本の姿をうかづつたものと、今更ながら（中略）敬服するの外はない」⁶¹と述べた上で「しかし、その所論中、日本建築に就いて疑義を挾まれた點に就ては（中略）敢えてこの一文を公にする」⁶¹と反論の意志を表明し「氏は前者（桂離宮）に就てはあらゆる絶讃を惜しまれぬのに反し、後者（日光東照宮）に對しては醜惡見るに堪へずとして、抜き落とし、果ては之は建築ではないとまで云われてゐる」⁶²とタウトの主張を総括した後「少くとも桂離宮に就てその業績が如何なる条件の下に成されたかを觀察されたと同様に、日光廟に關しても、何故か、異なる様相の建築が出来たか、否、出来て来なければならなかつたかといふ點に、所謂建築の良心を離れて考察する必要があつたと思う」⁶³と批判した。勿論、藤岡としても「單に表現の美とか組織の美などより見るならば、日光廟の繁雜なる様式は、確かに墮落の徴を示して、これを醜惡なりと伝ひ得るであらう」⁶⁴ことは認めている。しかし「タウト氏の説は、餘りにも皮相的獨斷に陥つてゐる點が多い」⁶⁵というのである。

藤岡は、例えば、桂離宮は「純然たる住宅」⁶⁴、日光廟は「靈廟といふ純粹の記念建築」⁶⁴であり、両者を同一の評価軸で論じること自体、元々困難なはずであるとか、インドのタージ・マハールが、インド様式とサラセン様式との混合であるにも係らずインドを代表する建築足り得ているとの伊東の見解を援用しつつ、東照宮も中国からの「輸入様式と云へば云ひ得るかも知れぬが（中略）完全なる日本化を具現し得て居た」⁶⁶といった反論を展開した。しかし、最後には「私と雖も自己の主観のみを以て之を評價すれば、左程に高く評價する事は出来ない。」⁶⁶とも吐露している。

先にも述べた通りタウトの東照宮批判に、少なくとも邦訳された著作を読む限り、葛藤や躊躇は全く読みとれない。タウトの見解を受け入れれば、日本人の東照宮評価を巡る葛藤は解消されるかに思われる。これに対して、藤岡は、自らの内にも葛藤が存在することを認めた上で、それを堅持しようとしている。^{注15}

5. 昭和初期の建築史文献に於ける日光東照宮評価

まず、日本建築史の通史が、高等教育及び専門教育に於ける教科書として用いられるべく刊行されたものであった点に言及した上で、そこに表れた東照宮評価が、その当初から、葛藤を含んだものであった点を指摘しておきたい。しかし、その葛藤は、明治中期のものとはその様相を異にしていた。陽明門に対する岸田の「比例釣合の美は到底みられない」という、範を古典に求めた上で比例美を重視する視点も、藤島や足立の本質を無視或いは減却しているという、予め「本質」的なものの存在を前提とする視点も、ともに明治期には無かった新しい視点である。また、藤岡の「主観のみを以て之を

評價すれば」とは、今日言うところの「好きか嫌いかと問われれば」に他ならない、従って、彼は、東照宮を好きにはなれないが価値は認めざる得ないという葛藤の中にいる。岸田の「日本建築史」と「過去の構成」に於ける発言の対峙も同様である。彼らの葛藤は、明治期の塚本や伊東に見られた過飾批判と「本邦無二の國寶」という葛藤と、価値を認める点では共通しているが、批判が嫌惡に変化している点では一線を画すものとなっている。そして、その伊東も、この時期に至って、東照宮を日本建築の美の象徴として取り上げる意欲を失っている。更に、研究者の言説に、主観的な表現が顕在化するのも、この時期の東照宮批判の特徴である。日光の自然美と人工美という視点からの評価は依然として広く見出されるが、東照宮三百年祭を記念して刊行された「日光」^{注16}の趣旨からすれば、それは本来、日光の大自然と壯麗なる東照宮という対比であったはずで、その適用を建築配置に限定した評価は、大正期までのものと比較すれば遙かに後退した内容である。葛藤そのものは失われていないが、葛藤の内容は大きく変質し、全体の流れは、明らかに批判の側が強化される方向へと進んでいる。

一方、タウトは、伊勢や桂を殆ど無条件に礼賛した上で、東照宮に対しては極めて批判的であった。少なくとも邦訳書を読む限り、その東照宮評価に葛藤は見出せない。実は、ここにこそタウトの見解の特徴があった。藤岡がタウトの明快さを皮相的と批判した背景には、自らの内に葛藤が存在することを認めた上でそれを堅持しようとする藤岡自身の意志と、タウトの東照宮評価に葛藤が見出せないことへの苛立ちがある。タウトのこの葛藤無き批判が、彼の真意をどの様に反映したものであったかについては稿を改めるとして、ここでは、邦訳書からは葛藤が読みとれないこと、研究者の多くがタウトの東照宮批判をその様なものとして理解していたことの方を指摘しておきたい。

また、岸田の「世界の建築家ブルノ・タウト教授の言とあらば、すべての人がなるほどと肯くだらう」との指摘は、逆に、無批判に東照宮を礼賛するという意味で葛藤のない人々、藤島の言葉を借りれば「俗人」の啓蒙に、タウトを援用しようとするものであるが、岸田の意図が実現すると、論理的には「俗人」が葛藤を獲得することになると考えるのが自然であるが、実際には、彼らが「伊勢神宮と桂離宮の建物が古今の超越した絶世の傑作である」という価値観に一挙に辿り着くことを期待しているかに見える。同時に、岸田の言説には、タウトの発言を援用する自分へのアイロニカルな感情も垣間見える。

最後に、藤島の「讀める人は多く俗人（中略）貶す人は多く建築や諸藝術の専門家」という指摘は、明治中期以降、東照宮評価を巡って専門家の内に生じた葛藤が、昭和初期に至って、一般の人々による礼賛と専門家による批判という構図へと変化しつつあり、一般の人々と専門家の間に東照宮評価を巡って分裂が生じつつあったことを示唆する発言であった点には再度言及しておきたい。

6. 結 論

日本建築史の通史が、高等教育及び専門教育に於ける教科書として用いられるべく刊行されたものであったこと、一方、義務教育に於いては、明治の初頭、南間綱紀が「日光山ニ東照宮ノ社アリ。其壯麗日本第一稱ス。」と記して以来、敗戦に至るまでその評価に

全く揺らぎがなく、寧ろ礼賛の方向へと強化されていったこと^{注01}を考えると、明治中期に専門家の内に生じた賞賛と批判の併存という葛藤は、昭和に至って義務教育と高等教育の対峙という事態へ進みつつあった構図が浮かび上がる。研究者は、高等教育及び専門教育を通して、この構図の一翼を担っていた。換言すれば、この構図の形成過程に深く関わっていた。従って、彼らは事態の全体像を理解出来る立場にあったことになる。一方、研究者にとってタウトの東照宮批判は、変質しつつもいまだ残されていた自らの葛藤を精算する一つの有力な契機となった。勿論、葛藤を堅持しようとした研究者も依然として存在したし、葛藤の精算へと進んだ研究者も、人々の圧倒的な東照宮礼賛を前提としており、彼らが幾ら批判しても東照宮の価値は決して損なわれないという信頼感と絶望感が同居した認識の中で発言していたものと推察される。十分な信頼感があったからこそ、藤島の「本質を無視して居る」や、足立の「本質を滅却してある」といった、見方によっては決定的とも言える批判が可能となり、絶望感からこそ、岸田は「世界の建築家ブルノ・タウト教授の言とあらば、すべての人になるほどと肯くだろう」とアイロニカルに語ることが出来たと言ってもよいだろう。

7. 謝 辞

本研究の過程で、小池喜明東洋大学文学部教授他東洋大学図書館個性形成委員会、委員各位から、実に多くのしかも貴重な助言を頂きました。また、本論執筆に当たっては、建築史家故稲垣栄三氏が執筆された「日本建築学発達史」「10編建築史学史・7章建築史研究の隆盛」がその基点となりました。更に、藤森照信東京大学教授からは、実に長きに渡って近代建築史全般について多くの助言を頂きました。

ここに心から御礼を申し上げます。

最後に、貴重な時間を割いて査読の労に当たられた各位にも心から敬意を表します。

注 記

注-01 内田祥士「近代日本の初等教育及び専門教育に於ける日光東照宮評価」

日本建築学会計画系論文第579号P127～P134 2004年 5月

注-02 以下引用部分を除いて東照宮と略記するが全て日光東照宮を指す。

注-03 内田祥士「大正期に於ける日光東照宮寛永造替工期の訂正と当時の東照宮評価」

日本建築学会計画系論文第573号P155～P161 2003年11月

注-04 大河直躬「桂と日光」日本の美術20平凡社 昭和39年 4月20日発行
本文冒頭「桂と日光」で「タウトの評価」という一項を設けて以下の様に記している。

「日光を『威圧的』『珍奇な骨とう品』と痛烈に批判した。(中略)それまでの建築を飾った情性的な装飾を廃することを目標とした近代建築家の立場からの批評として、たいへん鋭いものが感じられるが、同時に伝統破壊をいそぐあまりの偏見も多く、一つの歴史的発言として読むことができる。」(p.15)

注-05 大熊 喜邦「日光東照宮の寛永造替に就て」建築雑誌 第515号

明治期には、東照宮寛永造替工期は、寛永元年三代将軍徳川家光が、改築を企て寛永13年春まで約13年間を要して完成させたと考えられていた。(以下、本論においては通説と記す)

大熊喜邦は、昭和3年11月 甲良家文書から、東照宮寛永造替工期は寛永11年末から寛永13年春迄であるとの結論を導き出した論文を発表し、平泉説を追認した。(以下、本論においては平泉説と記す)

注-06 平泉 澄「誤られたる日光廟」史学雑誌 第32編 第2号

大正10年 2月発行

寛永造替工期を13年とするのは誤っていると最初に主張したのが、平泉澄である。彼は、「史学雑誌」(第32編第2号 大正10年2月発行)に発表した「誤られたる日光廟」という論文の中で主要な工事は、実は寛永11年正月から寛永13年3月迄の約15ヶ月間で完了していると主張した。(以下、本論においては平泉説と記す)

注-07 塚本 靖「日光廟建築装飾概論」建築雑誌 第124号 明治30年4月

「西洋でも日本でも建築の衰へた時は同じく曲線が濫用になったゴシックのフランボヤント、レネーサンスのロココは孰れも曲線の濫用であったが此日光廟を見ると曲線の濫用が矢張りあります」(p.120)

注-08 関野 貞「徳川時代の建築」工業大辭書・第四巻

「是れ當代に於ける最壮麗にして、最完備せる代表的靈廟建築なり(中略)寛永元年將軍徳川家光更に大に規模を擴張して改築を企て、甲良宗廣を總棟梁となし國帑を傾け天下の力を極め海内の名工を集め盛んに經營し、寛永十三年四月に至り功を終る。(中略)蓋此廟は當時の技術家が全力を極盡て經營せし者にして、其殿堂門廡は或は髹漆を以て、或は金繪を以て或は彫刻繪畫を以て、或は飾金具寄木細工を以て裝飾し、其者麗古今此儔を見ず、施工の精美、手法の新奇、意匠の豊富、實に當代初期工藝の精華を集めて之を大成せる者なり。唯規模の小なると手法の繁夥の弊に陥りたるを惜しむべきのみ」とある。

p.3092～p.3093

注-09 足立 康「建築史」

昭和16年 5月

第3巻3号p.197～p.209

詳述は避けるが、内容は東照大権現と権現造とは無関係であるとした上で、東照宮は「石間造」であるというものである。

注-10 本論では、稲垣が紹介した通史から「日本建築史」という題で、少なくとも近世までの建築が網羅的に扱われている著作で、単著のものを選んだ。昭和初期の通史としては他に次の様な著作がある。

佐藤 佐「日本建築史」大文館 大正14年 3月15日発行
天沼 俊一 校閲

佐藤 佐「大日本建築全史」文叢堂書店 昭和 8年 7月 5日発行

天沼 俊一「日本建築」弘文堂 昭和17年 9月20日発行

太田 静六「日本の古建築」寶雲舎 昭和18年 8月20日発行

注-11 ブルノ・タウト「タウト全集全6巻」育成社弘道閣 昭和17年～昭和19年

但し、第4巻欠

注-12 同書の刊行は、昭和4年であるからタウトの来日以前であり、且つ、先に言及した岸田自身の著作「日本建築史」刊行の3年前と言うことになるが、昭和9年に於いて尚「過去の構成そのものが高度の永遠性をもつてゐる」と指摘している点に鑑み、関連資料としてここで言及することにした。

注-13 「建築学大系」4

彰国社

昭和32年 1月 1日発行

藤岡は、3. 近世の1～9を執筆している。東照宮は、その3. 6に記されている。因みに3. 近世は0～11から成る。

注-14 伊東 忠太「建築美について(下)」

p. 201

「二、神明造」に「建築家ブルノ・タウト氏は親しく神宮の建築を拝して感激昇奮措く所を知らず、『これ獨り日本建築の精霊なるのみならず、實に世界建築の精霊である。』と叫んだ。予は彼にその具體的説明を求めた處、彼は『よく言葉の竭す所でないが、要するに釣合の優美材料の善美、構造の誠等より来る純眞、崇高、端嚴の風格を現はす至高の建築である』と語った。」と記している。

伊東 忠太「建築美について(下)」

p. 208

「十四、桂離宮」に「予を以て見れば智は餘り過ぎたるの憾がある。ブルノ・タウトは之を激賞して『これは眞の理想的建築である、獨逸に於ける建築は今や全く行き詰り、新生面を拓かんとすれども未だその道を知らざりしに、今この建築を見て始めて悟ることが出来た。云々』と言つた。」と記している。

注-15 藤岡は昭和12年 1月 1日発行「畫説」に「御香宮拝殿の建築に就て」という一文を書いているが、既に次の様にタウトを批判している。
「ブルノ・タウト氏が日本へ來た時、伊勢大神宮と桂離宮を觀て、その表現と構造の簡素にして純眞卒直なることに驚歎し、之こそ眞の日本建築なりと絶讃したのに反し、日光の建築を難じて支那建築と何等擇ふ所なく、美しくも何ともないといった意味の事を發表した事がある。日本人が簡素清浄を好む國民なる事はタウト氏に教へられる迄もない事と思うが、唐宋の建築を輸入してそれが最も日本化したと云はれる藤原、桃山の兩時代に、凡そ日本人の趣味と相容れぬが如き極彩色の華麗なる建築が生れたのは何とした事であらうか。」(P 41)
と問うた上で「桃山時代に於て建築に彫刻を盛んに用ひ出したのも、要するにこの自然に親しむ國民性の發露であつて、鎌倉、室町と進展した建築に飽き足らぬ日本人は、之に自然物の彫刻を融合させて、以て自己の趣味を満足させたのではないかと思ふ。又一つには當時建築物の耐久性から木部を漆で包む事が行はれ、素木の美しさから餘儀なく隔離せられたる結果、自然物を寫した彫刻を利用する事に急激に拍車がかかけられ、それが江戸初期に於ける日光等の廟建築へ發展して行つたものとも考えられる。」(p.42)

注-16 「日光」 東京印刷 大正 4 年 6 月 発行

引用文献

- 01 稻垣 栄三「日本建築学発達史」 p. 1752
- 02 天沼 俊一「日本建築史要」 飛鳥園 昭和 2 年 8 月 25 日発行
- 03 同 上 p. 1
- 04 同 上 p. 2
- 05 同 上 p. 449
- 06 同 上 p. 451
- 07 藤島亥治郎「日本建築史」 構成社書房 昭和 5 年 11 月 20 日発行
- 08 同 上 序
- 09 同 上 p. 148
- 10 同 上 p. 150
- 11 岸田日出刀「日本建築史」 雄山閣 昭和 7 年 5 月 10 日発行
- 12 同 上 自序
- 13 同 上 p. 165
- 14 同 上 p. 166
- 15 大岡 実「日本建築様式」 常磐書房 昭和 9 年 3 月 19 日発行
- 16 同 上 緒言
- 17 同 上 p. 416
- 18 同 上 p. 418 ~ p. 419
- 19 関野 貞「日本建築史講話」 岩波書店 昭和 12 年 7 月 29 日発行
本書は、昭和 4 年に関野が行った講演記録を、関野の死後、足立康と大岡實が校閲し、昭和 12 年に刊行したものである。
- 20 同 上 序 p. 1
- 21 同 上 p. 193 ~ p. 194
- 22 足立 康「日本建築史」 地人書館 昭和 15 年 11 月 28 日発行
「建築史」昭和 16 年 3 月 (第 3 卷 2 号 p.162)
岸田日出刀が「工學博士足立康著『日本建築史』を読む」を書いている。その最後は「正しく『日本建築史』を學ぶ手頃の好著として本書足立博士の『日本建築史』を得たことは、學界のためまた更に一般社會のため欣快に耐へない」と結ばれている。
- 23 足立 康「日本建築史」 p. 2
- 24 同 上 p. 164
- 25 ブルノ・タウト「ニッポン」 明治書房 昭和 9 年 5 月 25 日発行
書誌的な事柄については下記を参照した
酒井 道夫「ブルノ・タウト著『ニッポン』の出版企図の変遷について」
「武蔵野美術大学研究紀要」昭和 61 年 3 月 31 日発行 p.83
- 26 同 上 序 p. 4

- 27 同 上 序 p. 4
- 28 同 上 p. 3
- 29 同 上 p. 9
- 30 同 上 p. 44
- 31 同 上 p. 45
- 32 ブルノ・タウト「日本文化私観」 明治書房 昭和 11 年 10 月 15 日発行
- 33 同 上 p. 3
- 34 同 上 p. 166 ~ p. 167
- 35 同 上 p. 167
- 36 同 上 p. 239
- 37 同 上 p. 297
- 38 ブルノ・タウト「日本美の再発見」 岩波書店 昭和 16 年 6 月 18 日発行
書誌的な事柄については下記を参照した
酒井 道夫「『日本美の再発見』を再発見する」
「酒井 道夫編『編集研究』」武蔵野美術大学出版局
「日本建築の基礎」の初出については議論があるが、「日本評論十月特輯號」昭和 11 年 11 月 1 日発行に掲載された「日本建築の史的考察」という論文が、内容から考えて初出ではないかと推察される。
- 39 同 上 p. 2 ~ p. 3
- 40 同 上 p. 3
- 41 同 上 p. 10
- 42 同 上 p. 23
- 43 同 上 p. 25
- 44 伊東 忠太「見廟建築の美を論ず」「国華」 第十七編第二百號
- 45 同 上 p. 541
- 46 岸田日出刀「日本の古建築を見直す」「国際建築」 昭和 9 年 1 月号
- 47 同 上 p. 15
- 48 同 上 p. 15 ~ p. 16
- 49 同 上 p. 17
- 50 ブルノ・タウト「国際建築」 昭和 9 年 1 月号
題名「予は日本の建築を如何に觀るか」
冒頭に、東京帝国大學新聞五〇〇號所載とある。後に「ニッポン」に「否ー桂離宮を経てー」の一部としてその p.144 に採録されたものと推察される。
- 51 同 上 p. 19
- 52 岸田日出刀「過去の構成」 構成社書房 昭和 4 年 12 月 20 日発行
- 53 同 上 p. 61
- 54 藤島亥治郎「日本美と建築」 明治書院 昭和 17 年 9 月 5 日発行
- 55 同 上 p. 186
- 56 同 上 p. 187
- 57 同 上 p. 188
- 58 伊東 忠太「建築美について (上)」「国華」第 45 編第 5 冊 第 534 号
「建築美について (下)」「国華」第 45 編第 7 冊 第 536 号
- 59 伊東 忠太「建築美について (上)」 p. 128
- 60 藤岡 通夫「タウト著『ニッポン』を讀みて日光廟の建築を論ず」
「畫 說」 東京美術研究所 昭和 12 年 3 月 10 日発行
- 61 同 上 p. 24
- 62 同 上 p. 24 ~ 25
但し、(桂離宮)(日光東照宮)は筆者
- 63 同 上 p. 25
- 64 同 上 p. 28
- 65 同 上 p. 31
- 66 同 上 p. 31 ~ 32

(2004 年 12 月 8 日原稿受理, 2005 年 4 月 20 日採用決定)